# ボトムアップで始める図書館-URA連携の取り組み：振り返りと展望

*新澤 裕子[1], 尾城 友視[2], 古宇田 光[1], 田口 忠祐[3], 立原 ゆり[2], 横井　慶子[2]
[1]東京大学リサーチ・アドミニストレーター推進室、[2]同 附属図書館、[3]同 情報システム部

## 背景

- 第6期科学技術・イノベーション基本計画下で、オープンサイエンス政策が推進。
- 大学における実践にあたっては、部署をこえた機関としての協働が求められる。

**第6期科学技術・イノベーション基本計画**
「新たな研究システムの構築（オープンサイエンスとデータ駆動型研究等の推進）」
研究者の研究データ管理・利活用を促進するため、例えば、データ・キュレーター、図書館職員、URA・・・図書館のデジタル転換等の取組について、2022年度までにその方向性を定める。【科技、文、関係府省】

政策文書で図書館職員とURAが併記（初？）
URAにとっては業務領域の拡大

**公的資金による研究データの管理・利活用に関する基本的な考え方**
（2021年4月27日）

**学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向けた基本方針**
（2024年2月16日）

**オープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について（審議のまとめ）**（2023年1月25日）
大学図書館職員は、これまでの業務に加え、研究データの管理にも携わることになるため、大学における学問の在り方や研究のライフサイクルを理解することが不可欠であり・・・

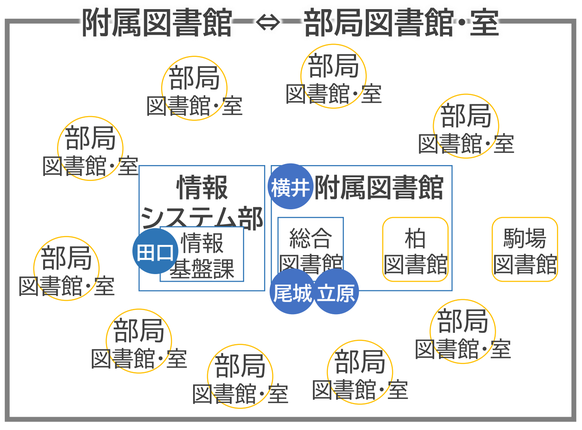
図書館職員にとっても業務領域の拡大

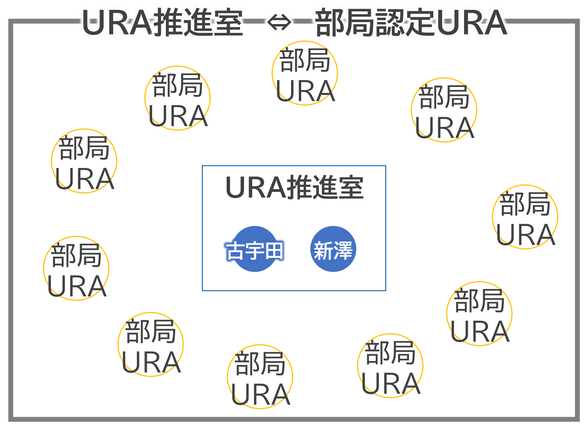
## 現状・課題意識：東京大学の図書館・URA体制

大学におけるオープンサイエンスの実践にあたって、柱の一つは図書館職員とURAの協働。
しかし、今まで学内に明確な図書館・URAの協働スキームが存在せず、シナジーを発揮できていなかった。

東京大学の組織＝本部と自主・自律性の高い多数の部局　という構造

図書館とURA体制の相似（組織構造）




## before：局所的なシナジー

| | | |
|---|---|---|
| 1 | APC支出額の調査・分析 | URAに相談したら詳細な分析データが出てきて感動！（図書館） |
| 2 | 図書行政商議会 OA WG | 図書館の会議にURAが初めて陪席、OAやジャーナル問題について幅広く課題を共有 |
| 3 | オープンアクセスポリシーの策定 | 図書館主体での策定が難しくURAに協力を依頼（図書館） |
| 4 | 研究データ管理・利活用ポリシーの策定 | 研究データについて図書館に詳しい人がいる…！と気づいた（URA） |
| 5 | 研究情報管理システム | ORCIDとのデータ連携検討を図書館の専門家と協働で実施（URA） |

研究データの管理・利活用をはじめとして、URA、図書館、情報基盤の協働、機関全体としての取り組みが欠かせないな…

「共催」という枠組みを組織（上長）が了承したことで、その後の協働もしやすくなった

URA

2023年度
**URA勉強会 研究DXシリーズ**
URA推進室、附属図書館、情報基盤センターの共催に

## 取り組みの経緯と発展

局所的なシナジー　1　3　4　2　5

転換点（後押し）

ボトムアップで協働開始

t

## 転換点（後押し）

- URA推進室・附属図書館・情報基盤センターの共催による「URA勉強会 研究DXシリーズ」の記念すべき第1回、NISTEP・林和弘氏に「**オープンサイエンスの潮流を“研究者と組織”としてどう活かすか**」をお話しいただいた。

### 1 悩んでいた

URA有志で研究データ管理・利活用を議論してきたが、次の一手が描けない。他部門との連携に糸口があるのではないか…　URA

研究データ管理・利活用や即時OA義務化…大学としてどう対応することになるんだろう。より研究に近い立場の方々との協力が必要だ…　図書館員

### 2 林先生の講演を聞く

（即時OA義務化等の）喫緊の課題に対応するためにはチームで取り組むべき。大学内であれば研究推進、URA、図書館。

オープンサイエンス時代の大学図書館にとってURAとの協働は必然。

セミナーは研究者からも好評でした

【アンケートの声】非常に啓発的だった。オープンサイエンス化による研究発表の質の低下が懸念だったが、功罪を理解したうえで積極的に参画するモチベーションになった。

### 3 背中を押される

今後の協力関係を築く最初の一歩を踏み出す意味で、URAと図書館のディスカッションの場を設定しませんか？

ぜひ！！

勉強会終了後に図書館から声がけがあり、有志の場が設定された

## after(ongoing)：ボトムアップで始める協働スキーム ❶ 学内に対するセミナー共同開催

### 協働したからできたこと

- 同じテーマでも視点や情報源が異なるのでより多角的な企画になった
- 図書館/URAが講師となったときの説明にも、多角的な視点が反映され、研究者への説得力が増した
- 科研費DMPの回では、研究者から多くの質問を受けたURAだけ/図書館だけでは、答えることが難しいものも、互いの知識を補完することで可能になった（研究推進部からも協力を得た）
- 附属図書館が共催となっていることで「聞かなきゃ」と思って参加した学内の図書館職員は少なくなさそう
  ⇒「これから関わる必要がある領域」という関心を喚起できた？
  ⇒ 今後の協働スキーム拡張に向けた種まきとなった？

最初は「URA勉強会」という枠組みをつかっていた
2023年度　URA勉強会研究DXシリーズ
1 オープンサイエンスの潮流を“研究者と組織”としてどう活かすか（講師：学外）
2 研究支援AIツール完全攻略マップ（講師：学外）
3 研究効率化AIツールの実践的活用法（講師：学外）
4 研究成果オープンアクセスの可能性を探索する（講師：学外・URA）

「研究ブーストセミナー」という枠組みにパワーアップ
2024年度　Open Scienceの歩き方シリーズ
1 科研費交付申請に向けたDMP作成（講師：学内・図書館＆URA）
2 ORCIDを使って研究業績を管理・発信しよう（講師：学内・URA）
3・4 研究データの管理・利活用の実際―分野毎の事例（講師：学内・教員＆URA）
5 学術論文と研究データにまつわる権利―著作権とCCライセンス（講師：学外）

To be continued…

## after(ongoing)：ボトムアップで始める協働スキーム ❷ 協働のための基盤づくり（ゆるいつながり）

図書館とURA、もっと一緒にやらなきゃ…！きっといいことがある…！

### 1 グループチャットの利用

- 大学が提供するOffice365のTeamsを利用し、図書館有志・URA有志が参加するグループチャットを設立（2024年9月時点のメンバー数：25名）
- 関連イベントの周知、関心のあるニューストピックの共有・議論…など

URAの方が興味・関心を持つ事柄を知ることができて新鮮

図書館の方は、今まで得られなかった情報を届けてくれる

互いを知ることが協働の基盤になり
かつ互いの業務の高度化にもつながる

### 2 URA連絡会議に図書館有志が参加

- 学内の認定URAの情報共有の場として毎月開催している「URA連絡会議」に、図書館有志が参加し、図書館の業務とオープンアクセスに関して話題提供（2024年5月）

URAにとっては図書館の業務について初めて深く知る機会

図書館メンバーが作る資料の美しさにURAが感動

### 3 URA研修を図書館有志が受講

- 毎年開催している学内向け「リサーチ・アドミニストレーター研修（URA研修）」を図書館有志が受講（2024年6月）

URAのための研修だと思っていたので、まさか参加できるとは思わなかった

実際に参加してみて、URAの多様な業務や、皆さんの豊かなバックグラウンドに驚いた

## 今後の展望：協働スキームの深化・拡張を目指して

**課題**
- **属人化**
  組織体制として整っているわけではない
  図書館・URAの中でも仲間を増やす必要あり
  ⇒ **協働スキームの拡張の必要性**
- **ボトムアップ的な活動へのエフォート確保**
  本務の波や異動（※図書館職員）に左右される
  ⇒ **協働スキームの深化の必要性**

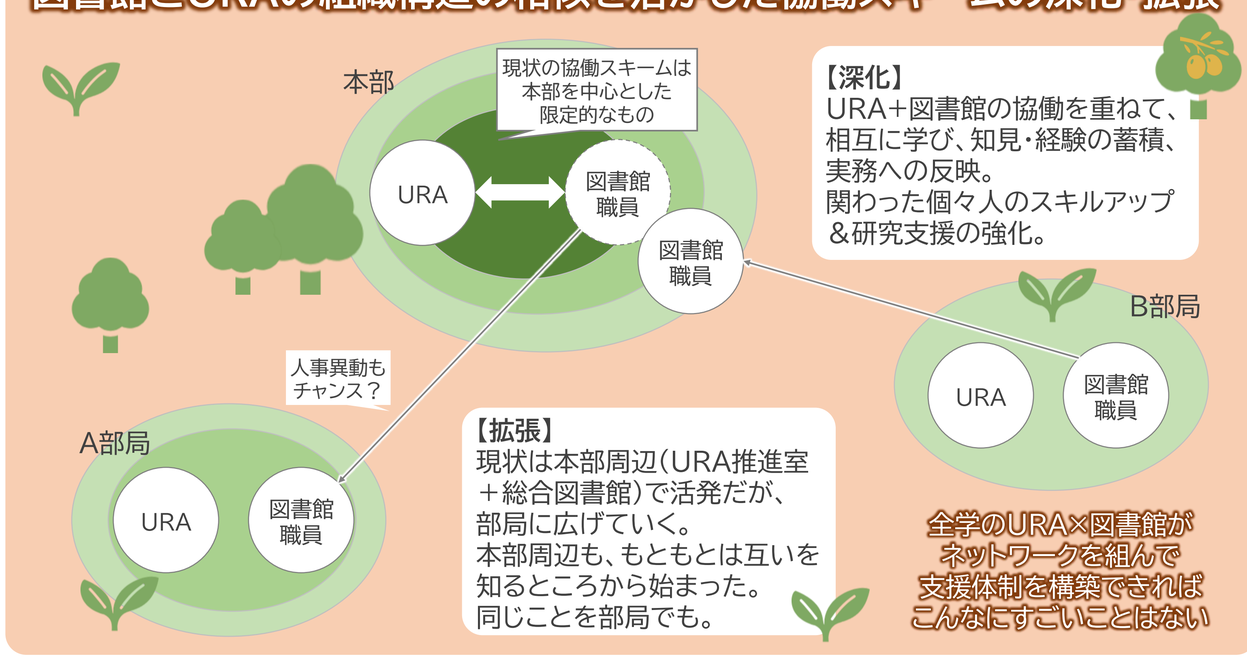
メンバー固定で自由度が高い方がやりやすい面も：悩ましい

### 展望の一案：共通のモノをともにつくる・育てる・成長する

セミナーの共同開催・質問への共同対応 → 展開 → 「オープンサイエンスの推進」「研究データの管理・利活用」という共通のテーマに対し異なる部署から人材が参加しともに学びニーズにこたえられるフレームワークの設立を検討

- 情報提供するために、自ずと学ぶ：ニーズに応えるために調べ・学ぶ。
- その様子を同僚が見て、ともに成長。
- 共通フレームに様々な人が参加し、バトンをつなぐ。
- 正統的周辺参加。

## 図書館とURAの組織構造の相似を活かした協働スキームの深化・拡張




リサーチ・アドミニストレーション協議会第10回年次大会（2024.10.16-17）@OIST